

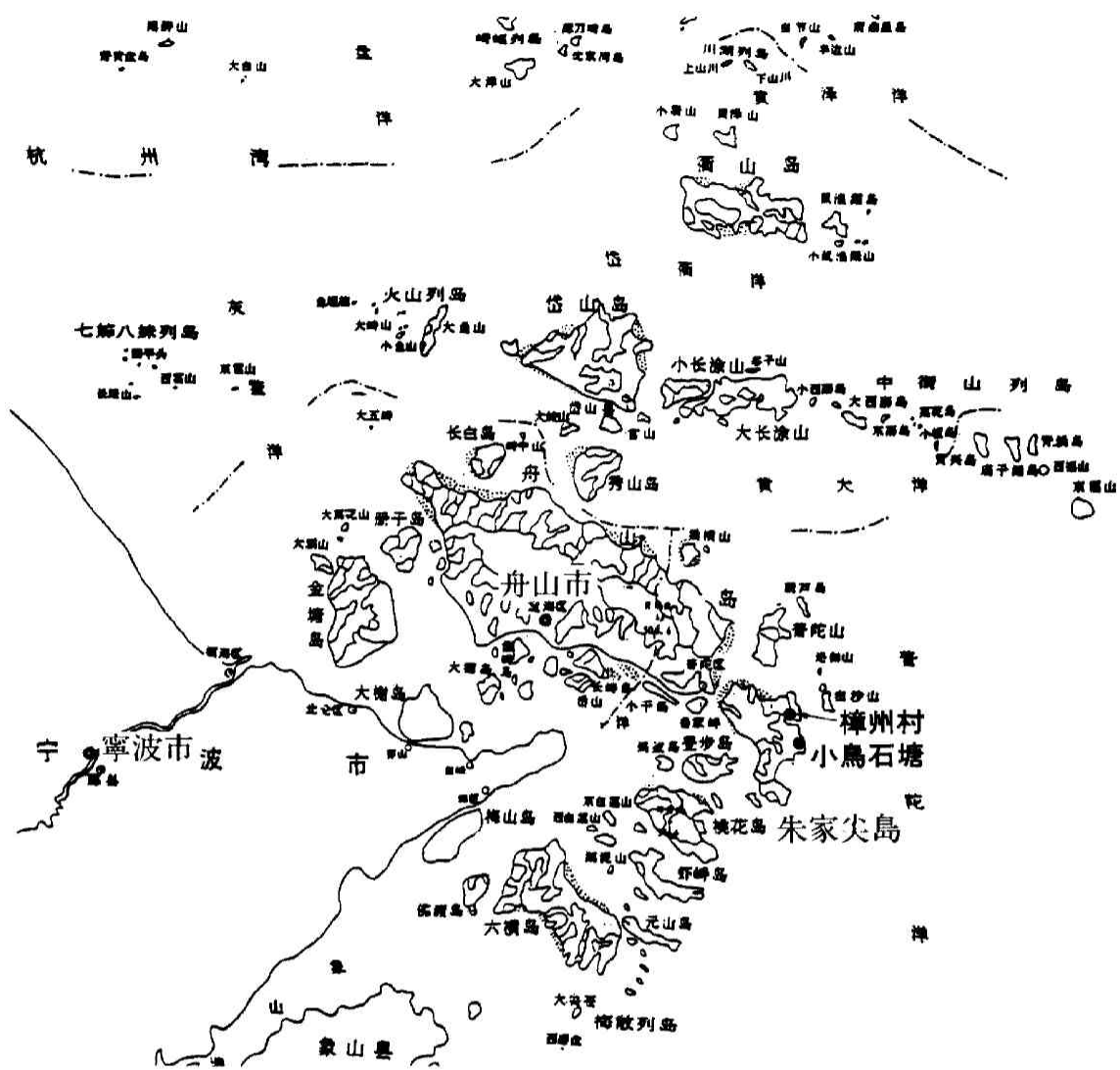
中国東南部・浙江省舟山群島の 伝統的造船所と漁村——舟山本島・朱家尖島の場合

田島 佳也

はじめに

一九九六年の十一月七、八日の両日、寧波の北東、東シナ海に面した舟山本島と、その群島のひとつ朱家尖島に渡り、漁村を見学した。現在、定海区・普陀区など四つの行政区にわかれている舟山群島は上海の南、寧波の東南海上にある島々である。その島々の中心が舟山本島である。この地域の海は水産資源が豊富で、中国の三大漁場のひとつとなっている。舟山本島には寧波からフェリーで渡ったが、舟山本島の伝統的造船所を見聞し、翌日、朱家尖島で蝦干しと漁村を尋ねることができた（地図参照）。ここでは見聞したことを時系列に紹介することにした。

なお、現地での通訳は浙江省海外旅行社社員で舟山島定海出身の趙燕波女史である。



浙江省 舟山群岛略图

一 舟山本島の伝統的造船所と漁獲物加工基地

1、位置と歴史の概要

十一月七日、フェリー発着場の寧波市白峰外時島東輓港から、二十八人乗りの快速船で舟山本島の鴨蛋山に約三十分で着いた。島の西側にあるこの定海区鴨蛋山からはまた、島の東側にある普陀区沈家門に向かった。

そもそも、中国東南部・浙江省寧波市の東に突き出た穿山半島を取り囲むように海上に点在する舟山群島は、大小合わせて千三百三十九島からなる。このうち有人島はわずかに九十八島にすぎない。舟山本島はそのなかでも面積五〇二平方キロを有する最大の島である。中国全土のなかでも第四番目に位置する大きな島で、人口は現在九十七万人余である。産業は漁業が中心で、わずかながら農業も行われている。一九八七年に市制が施行された（マルハ社内報「WONDERLAND」一九九五年一月号）。

こうした特徴をもつ舟山本島の定海区の前浜は大猫島など多くの島々が浮かび、外敵を寄せ付けない、さながら海要塞のような地形をなしている。実際、明の時代にはここは海防の前線基地であり、寧波への入貢船の寄港地でもあった。明代の後期、すなわち十六世紀になると、舟山本島を含めた舟山群島はこうした入港船と取引を行う海商やその船を襲う海賊の根拠地ともなったのである。なかでも、象山半島の全面にはだかる六横島は中国人に混ざってポルトガル人や日本人などが暗躍した密貿易の本拠地であった。また、寧波市鎮海区の海上に位置する金塘島は倭寇王と称された王直の基地でもあり、ここを基点に王直はじめ倭寇は海上を我がもの顔に跋扈したのである。

舟山本島と関係が深かったのは中世の時代だけではない。「鎖国」の江戸時代に入ってから関係は続く。宝暦二（一七五二）年に仙台藩領本吉郡気仙沼を塩鱧・昆布・煙草などを積んで銚子に向け出航した大嶋屋加兵衛船春日丸



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

(二十端帆、約七百石積)が百余日の漂流の末、翌年に舟山本島にほど近い桃花島(昔は華山と呼ばれていた)の金沙浜に漂着し、十二人が上陸・救助されている。桃花島は現在、舟山市普陀区に属し、舟山本島と同じく漁業が主産業の約二万人余の島であるが、春日丸のこの漂流の縁で宮城県気仙沼市と舟山市は姉妹都市になっている。いずれにしろ、春日丸のこのような偶然によっても関係が続いたのである(西田耕三編『春日丸船頭伝兵衛漂流記・史料』耕風社、一九九二、西田耕三『船頭伝兵衛漂流記覚書』耕風社、一九九三)。

2、川べりの伝統的造船所

舟山本島のなかを朱家尖島へ渡る半升洞渡口のある沈家門に向かったが、途中の国道沿いに造船所があった。舟山市の定海区と沈家門との境にあたる浦西経済開発区平陽浦・浙江水産学院前の川べりに、それはある。造船所は露天の伝統的造船所であった。川は水が少なかったことから、恐らく、満潮時を選び、川を塞ぎ止め、川水を溜めてから進水するものと推測される。

造船の順序は次の通りである(写真参照)。

- 1、丸太を簡単なバンドソーで一定の厚さに製材し、部位木を削るには長鉈を使う(写真1)。
- 2、シキ板を作り、船梁・船骨を形作り、船の骨格を製造(写真2)。
- 3、あらかじめ一定の厚さに切ったカジキ板をウインチ・鉄鎖を使い強制的に曲げ、所々に釘を打ち付け、船舷を仕上げていく(写真3、4)。

* 観察していると、船舷に使う板は充分に乾燥させた板とは思えず、あとで狂いが生じないか、疑問に思った。日本では丸太から板に製材したのち、それを充分に乾燥させてから利用するが、この造船所ではそうではなかった。

4、甲板を造る（写真5）。

5、住居部・エンジン部屋の後ろ甲板上に造り、ペンキを塗り仕上げる。

* 日本に帰国してから、廣田律子先生（経営学部助教授・日本常民文化研究所）に聞くと、船艀は後から焼き、海水の浸入を防ぐとのことである。だが、我々が見聞していた時には船艀の焼きを観察することができなかった。

3、マルハの中日合弁会社加工工場への漁獲物販売

露天の造船所から沈家門寄りにマルハ（旧⑤大洋漁業株式会社）の中日合弁会社「舟山興業有限公司」（一九九五
年一月十八日開業）の加工工場がある。残念ながら、会社に事前にコンタクトを取っていなかったために、工場内の
見学や日本人スタッフとの会見はできなかったが、工場に隣接する波止場に係留している多くの漁船の乗組員（漁
民）の話から、工場への漁獲物販売の実態を聞いた（写真6、7）。以下は、その概要である。

ちなみに、マルハは舟山興業有限公司を発足させる以前の一九七八年十二月に、舟山市と補償貿易をはじめとする補償貿易とは舟山市がマルハを窓口日本から資材を輸入し、代金を水産物で代物替えるパートナー取引である。その後、マルハは一九八五年四月に「舟洋漁業合営公司」の設立を皮切りに、「舟洋農業合営有限公司」や大連雙大水产、荣成荣洋水产、連江信用水产の各有限公司を設立している。その一つである舟山興業有限公司は約二千六百人の従業員を抱え、漁船四十六艘、一万トン級の冷蔵庫二基、加工場、船舶修理のための三〇〇〇トン・一〇〇〇トン・六〇〇トン級ドック三基をもっている。漁獲物は鯖・鰹・鰺・鰯・烏賊・ニベ・グチ・蝦などを扱っている。

さて、波止場係留の漁船に乗って漁業をしている福建省羅沅県出身の陳坤寿氏（推定年齢、三十代前半）の話によると、次のようであった。



写真 6

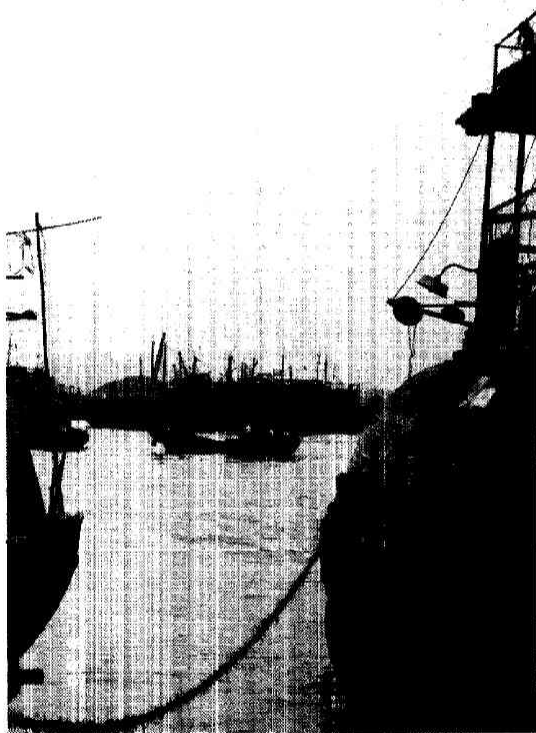


写真 7

- 1、漁船は自分達の持ち船で、舟山本島には福建から南の広東にかけて地域から出漁して来る者が多いこと。
- 2、家族総出で船に乗り込み出漁してきているが、長い海上生活のなかで同乗の女性たちは船中で炊事・洗濯を分担していること。

3、漁は海鰻漁が中心で、漁期は四月から十一月までであること。漁場は広東から舟山島にかけての海域が舞台であるという。ここである海鰻とは鰻のことである。

4、漁の終了後の十二月から翌年三月までは郷里に帰り、家族皆で過ごす。この間は漁をしない。以上である。なお、通訳の趙燕波女史の話によると、日本の沙魚は舟山群島では Hōze と発音され、日本語に極めて近いという。

二 朱家尖島の川蝦の天日干しと漁村

中国での漁村調査地・樟州村には、沈家門にある半升洞渡口の半升洞客運碼頭から〇・八海里（約一・四八二キロメートル）沖合の朱家尖島涼帽潭にフェリー（所要時間二十分）で渡り、そこから慶豊路を五眼硤・修竹庵を経由して行く。朱家尖島の総人口は現在約二千八百人であるが、ここでは川蝦の天日干しと樟州村の漁業現況を報告しておきたい。

1、朱家尖涼帽潭蝦米における川蝦の天日干し

1、川蝦干しは二反ほどの広さの畑の上に薄黒のビニールシートを敷き広め、その上で小蝦（約二センチ位の川蝦）を天日で乾燥させる。乾燥の所要日数は聞き漏らしたが、雨天を考えると一日ほどと推測される。ビニ-

写真 8

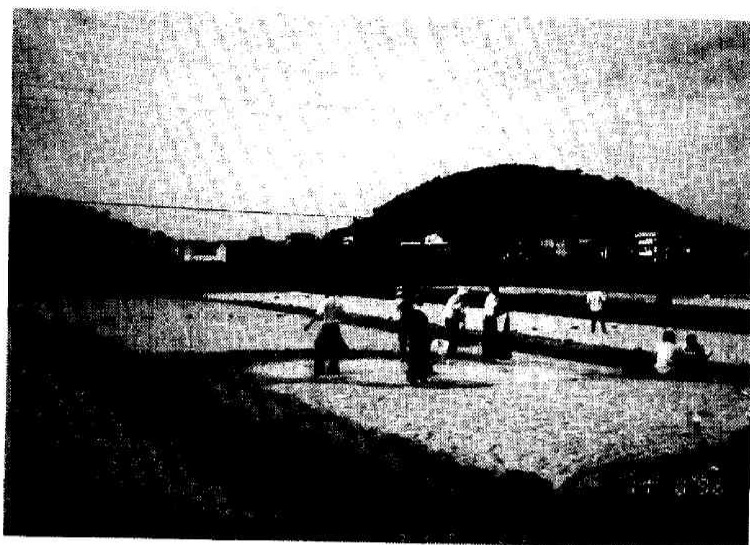


写真 9



写真10



ルシートの上では満遍なく小蝦が乾燥するように箒で掃き、拡散する。ビニールシート一面の上で作業する人数は男女合わせて五、六人前後であった(写真8)。

2、乾燥した小蝦を箒で掻き集め、それを長さ一二五センチの網袋に入れ、ビニールシートの上に置いた四・七センチ四方の板(厚さ二・三センチ)に網袋を肩から叩き付けて、蝦殻を取り除く(写真9、10)。

3、叩き付けられて粉状になった蝦殻は箒で掃き集められ、畑の肥料にする。近くでは綿作も行われているようであるが、それには用いず、野菜栽培の施肥に使うという。

2、漁村・樟州村の現況——聞き取り調査報告

現代中国の漁村調査を朱家尖島で行った。地理に不案内なため、あらかじめ浙江省海外旅行社に依頼し、調査対象漁村を紹介してもらったのが以下に紹介する樟州村である。舟山群島は十四、五世紀には和寇の拠点として有名な島であったことから、かなりの伝統を有する島・漁村であろう、と期待していたが、樟州村は一九六二年に新しく作られた漁村であった。以下は、現代中国の漁村の一端を、短時間の滞在で知り得た事柄の概報である。

なお、浙江省海外旅行社社員趙燕波女史と樓篠環女史の通訳のもと、樟州村の説明をしていただいたのは周志龍氏である。周氏は現在、舟山市普陀区朱家尖海洋漁業公司総経理書記を務めている。

①村の概況

樟州村は一九六二年、樟州村の南東に位置する朱家尖小島石塘からの移住者によって新しく作られた、男七百六十人、女七百四十人からなる専業漁業村である。田畑はない。表1によると、村には造船所二カ所、個人経営の冷凍工場一カ所(株式をもつ経営者は六人)や製網工場一カ所(ナイロンは他所からの仕入)、それに網店一カ所、理髪

店・食堂・銀行各二カ所、日用品販売店が七カ所ある。銀行は建設銀行と農業銀行の信用社である。その他に、公衆便所が一カ所あった。

村には学校はなく、島のほぼ中央の朱家尖鎮大洞岱に中心小学校がある。なお、村民憩いの娯楽施設はまったくない(写真11)。

②漁民と漁船

樟州村では漁業に従事する漁民は三百五十人で、すべて男性のみである。その人数を村の総人口との割合でみると、二三・三%、村の男性数だけの割合でみると、四六・一%となる。男性数には当然、子供・老人も含まれている。周氏の説明によると、労働に従事する年齢はだいたい十八〜五十八歳くらいといわれることから、漁業に従事する男性の比率が少なくとも村内男性の半数くらいになることは確実である。しかし、この比率だけで専業漁村といえるかどうか、はなはだ疑問である。ただ、漁業に付随して造船所・冷凍工場・製網工場があるとすれば、そこに働く工場勤務者が全く漁業を兼務していなくても、そこから専業漁村といえなくもない。とはいえ、工場勤務者の人数がどのくらいいるのか、はっきりした数値は知りえなかった。

ただ、工場勤務者が所属しているのかどうかは確定できないが、漁民は全員、樟州漁業会社に編成されている。

ところで樟州村の漁業は、一九九三年以前にあってはすべて国営であった。昔は漁船二十隻で操業されていたという。一九九三年以後はすべて個人営業になり、漁船も八十二隻に増加した。そのうち二隻は一九九三年から三年間の間に新造された漁船である。漁船の増加率を

表1 樟州村の漁業以外の職種

職 種	数
造船所	2
冷凍工場	1
製網工場	1
網理髪店	1
食堂	2
日用品販売店	2
銀行	7
銀	2
合 計	18

表2 樟州村の漁船数

年 代	数	増加率
国営時 (~1993年)	20隻	100
1993年以後	80	
	82	410
合 計	82	

中国東南部・浙江省舟山群島の伝統的造船所と漁村

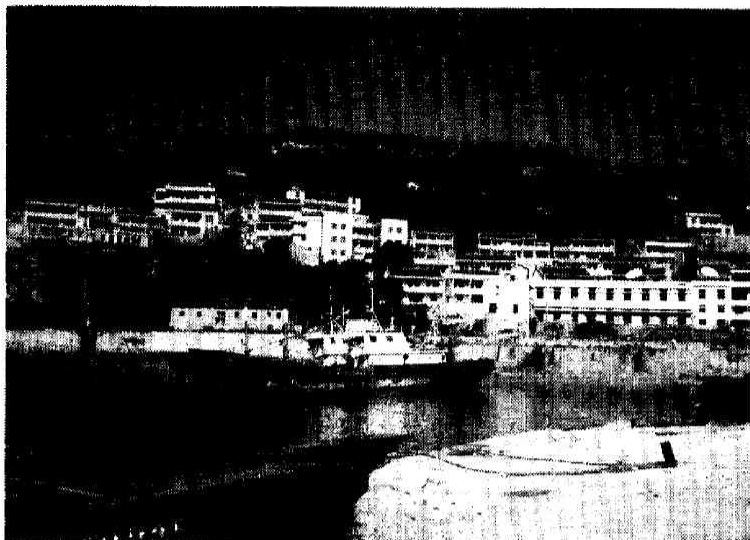


写真11



写真12



写真13

示したのが表2である。それで見ると、国営時の漁業経営に比べ、漁船はなんと四・一倍の増加率を示したことがわかる。漁船の著しい増加から判断して、漁村としての樟州村の発展の様相を垣間みることができる。しかも、その漁船は一隻当たり平均一五〇トンの動力船である。無動力船はない。

樟州村で我々は沖に停泊する漁船に漁民を運ぶ小型動力船を見掛けたが、それは他村からの一時的出稼ぎ船である、と周氏はいう。無動力船であれ動力船であれ、沖に停泊する漁船へ漁民を運ぶ運搬船が樟州村にないこと自体疑わしいが、今のところ周氏の説明を信じるしかない（写真12、13）。

③ 漁業の実態

樟州村の漁民は毎年、九月から翌年の六月一日まで漁撈活動に従事する。十ヵ月間の仕事である。約二ヵ月の休みの期間はマージャンなどの娯楽に耽ったり、造船所で漁船の修理にあたる。操業は九月から十月が上海の沖合の嵎山海（嵎泗列島近海）、十月から十一月は朱家尖島の北東に位置する中街山列島近海、それ以外は往復に十五日間ほどかかる朝鮮の済州島付近を漁場としている。嵎山海では、トーシャアミ（鉄管に等間隔に吊された網袋）や旋網を使って主に竹節蝦（赤蝦）を捕る。一ヵ月約一一〇トンの水揚げをするという。甘鯛も捕る。中街山列島近海でも旋網で竹節蝦・ワタリガニを年間一二〇トン、漁法は判然としないが蟹を年間一八〇トン漁獲する。朝鮮の済州島付近での操業はほとんど太刀魚漁である。年間一万二〇〇〇トンの太刀魚を水揚げする。

漁船には約四人が乗り込んで操業にあたるが、一隻あたり年間百萬元の利益をあげるといふ。この利益のうちから経費四十五萬元、内容の詳細は明らかでないが出漁に関わる人件費七・五・八・五萬元、国税三・五萬元、それに樟州村の行政を担う「村委員会」と村の共産党支部、それに漁民が所属する村の「樟州村漁業公司」に合計一・五萬元が支払われる。経費のなかでは国の石油公社から仕入れる漁船の石油燃料代にいちばん費やされるといわれる。また、

原則的には個人経営とはいえ、人件費には漁民が組織している「漁業公司」の運営費も含まれているとみてよいだろう。税金は国税と「村委員会」などに支払われる五万元である。したがって四十二・五万元ほどが一隻あたりの年間純利益であるともてよいだろう。それを乗組員四人で分けるのである。一人あたりにすると、約十万元の年間所得である。現在の為替レート、一元〓約十四円で換算すると、百四十万円である。樟州村が漁業の盛んな舟山群島のなかでいちばん豊かな漁村である、という周氏の説明を信じると、中国の上位の漁民の年間所得はこの金額とさほどかけ離れたものではない、と推測される。

その所得を実現させる漁獲物の販売先は漁獲物の相場（魚価）を睨んで「樟州漁業公司」が一括取り捌いている。ひとつは舟山の漁業公社に、もうひとつは舟山島の魚市場に、それにマルハの中日合弁企業「舟山興業有限公司」に、漁獲物が出荷・販売されている。このなかでも、近年はマルハに販売されることが多く、漁獲物は「舟山興業有限公司」の加工工場で缶詰や蒲鉾、干物に加工されて日本へ輸出されている。日本の家庭の食卓に舟山群島からの漁獲物がかなり出回っていることは間違いなく、それは舟山群島の漁獲物がいまや日本の漁獲物流通市場に完全に組み込まれていることを示すものにほかならない。

付記

今回の調査は中国の杭州大学で行われた学術交流シンポジウムのうち、神奈川大学外国学部の藤田一成・高橋繁男・岡島千幸・吉川良和各教授らのご指導・ご協力によって実現した。

なお、帰国後、歴史民族博物館の朝岡康二教授と会う機会があり、樟州村調査の概要を話したところ、舟山島の調査をここ数年手掛けているとのことであった。朝岡教授の話によれば、舟山本島には歴史をもつ漁村が多いという。しかも、それらの漁民は表面的には知りえないが、底流として長く差別されてきた存在であるらしい。所によっては

歴史的にも現在のにも、こうした点はわが国の漁民にもある。差別問題は慎重を期さなければならないが、当方の準備不足もあってこれらの点はまったく知りえなかった。

さらに、気仙沼市市史編纂室の川島秀一氏から春日丸の舟山島漂流とこれが縁で気仙沼市が舟山市と姉妹都市を結んでいるとのご教示を受けた。

また、参考にしたマルハ社内報「WONDERLAND」（一九九五年二月号）はマルハ広報部の松崎圭代女史から提供を受けた。

本稿をまとめるにあたって、右記の諸氏からご協力・ご教授をえた。記して感謝申しあげます。

（たじま・よしや 日本経済史）